

国立大学法人北海道教育大学

実践校：北海道教育大学附属札幌小学校（全校児童数：425人、実践研究の対象：第3学年71人、第4学年69人、第5学年70人）

①実践研究の趣旨・目的

北海道の子供たちの現状として、令和4年度全国学力・学習状況調査の質問項目における「地域や社会をよりよくするために、何をすべきかを考えることがありますか」「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」という項目に対して肯定的な回答が全国平均を下回っている現状（50.1%、46.7%）があるなど、各種調査の結果から主体的に社会に参画しようとする姿には課題があると考えられる。本実践研究では、子供自身が社会とのつながりを実感し、自分事として社会への関わり方を考えて動き出そうとする姿を引き出すことを目的として、教材作成や単元デザインを工夫しながら授業実践を行う。

②実践内容

（1）北海道教育大学での取組・工夫

北海道教育大学として実践研究の目的を達成するため、北海道教育大学附属札幌小学校を実践校と位置付け、社会科における指導を中心とした授業の取組を進めることとした。大学と附属学校が連携し、大学の教員が共同研究者として附属学校教員と共に授業づくりを行う体制を整えている。教科等横断的な視点や外部人材の有効活用の視点などからも取組をサポートしている。第6学年の社会科等の授業では、児童が様々なデータを集めて分析し、大学長宛に附属札幌小学校へのエアコン設置要望書を提出するなど、自分たちの意見が実社会へ繋がることを実感できるよう、工夫した実践を取り入れた。

（2）実践校（附属札幌小学校）での取組・工夫

2年間の実践研究を通して、以下の学年、単元の授業に取り組んだ。

- ・授業実践①第3学年「市の様子と人々のくらしのうつりかわり」
- ・授業実践②第4学年「地震災害からくらしを守る」
- ・授業実践③第4学年「のこしたいものつたえたいもの」
- ・授業実践④第5学年「これからの食料生産とわたしたち」

授業実践を行う際には4つの手立てを工夫した。

- ・手立て1 子どもが社会とつながる教材作成と単元デザイン
- ・手立て2 社会認識を深めるための一単位時間の設定
- ・手立て3 社会参画の力につながる一単位時間の設定
- ・手立て4 子供の具体的な姿の見取りと検証

子供が社会とのつながりを感じ、人物の営みを通して社会的事象の意味を考え、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりできるように工夫して、問題解決的な学習の充実を図った。

（3）校内の実施体制・外部連携

【校内の実施体制】

2年間の実施計画に基づいて授業づくりを行い、授業実践後に成果と課題を検証していくこととした。

授業実践については、北海道教育大学附属札幌小学校社会科部教諭3名を中心に行った。

【外部連携】

よりよい社会を構想している実際の人物の営みから学ぶため、以下のとおり外部人材の活用を行った。

＜第3学年＞

・札幌市 まちづくり政策局 都市交通課

＜第4学年＞

・札幌市 危機管理局

・北海道地域防災マスター

・札幌市時計台館長

＜第5学年＞

・J F E エンジニアリング株式会社

・農業学習施設 KUBOTA AGRI FRONT

【他教科等との連携】

・総合的な学習の時間、特別活動、特別の教科道徳

③実践の具体事例【小学校第4学年】

【単元名】自然災害にそなえるまちづくり～地震災害からくらしを守る～（3）

【単元目標】地域の関係機関は、地震災害に対し様々な対処や備えをしていることを理解するとともに、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりする。

時間	単元の指導計画	
	社会科	関連付けた他教科等
1.2	北海道や札幌市の地震災害の歴史を知る。単元の学習問題をつくり、学習計画を立て、自分なりの予想をする。	特別活動
3	単元の学習計画に合わせて、一人一人が調べる活動を行う。	
4	公助、共助、自助の視点から調べる。	
5	札幌市役所7階危機管理局の取組を通して、政治を身近に感じながら理解する。	
6	北海道地域防災マスターから、地域での共助の取組について、聞き取り調査をする。	
7.8	単元で学習したことを基に、地震災害に備えて自分たちにできることを考えたり選択・判断したりする。	

社会科
第7時
「地震災害に備えて自分たちにできることを考えたり選択・判断したりする」授業の概要

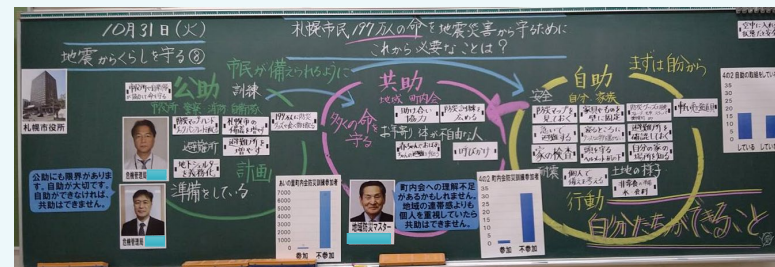
専門家や関係諸機関等との連携・協働

【単元評価】

単元で学んだ災害からくらしを守る活動と自分たちの実生活に関連付けながら、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりして適切に表現している。

＜概要＞

○北海道や札幌市などの関係機関は協力しながら災害へ対処したり備えたりしていることを捉えるとともに、今後起こり得る災害を想定し、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりする。



＜指導上の工夫＞

○自分が考えた災害への備えと市役所や地域防災マスターが考えた災害への備えの違いの比較から、自分たちにできることを見つめ直して考えられるようにする学習活動。

単元の学びの中で出会った札幌市役所危機管理局の職員、北海道地域防災マスターの方からの「公助や自助も大切だが共助の取組が大切である」という言葉をきっかけに、自分たちが考えていた災害への備えを見つめ直し、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりできるように工夫した。

④取組の成果や効果・課題

自分たちの住むまちの政治の働きとして北海道知事や札幌市長の取組、北海道や札幌市の取組、行政と北海道民が協力している北海道地域防災マスターの取組などを調べることで、公助、共助、自助の視点に立ち、地震災害からくらしを守る働きについて捉えることができた。また、よりよい社会を構想する具体的人物との出会いを通して、自分たちのまちを守っている人への憧れや感謝の気持ちを抱くことができ、自分たちも社会の構成員の一人として協力したいという気持ちが生まれた児童が多く見られた。

自分たちにできることを考えたり選択・判断したりする際には、「公助・共助・自助」の視点だけでなく「地震が起きる前の備え」や「地震災害が起きた後の行動」など、子供の思考を相互関係や時間の視点などで分類・整理する手立てを更に工夫することで、子供が自分の考えをより自覚的に捉えることができそうだという課題も明らかとなった。